法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

ヒューマニズムにかんする覚え書

YUKAWA, Kazuo / ユカワ, ヤスオ / 湯川, 和夫

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社會勞働研究 / Society and labour
(巻 / Volume)
19
(号 / Number)
3-4
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
14
(発行年 / Year)
1973-11-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00017967

ヒューマニズムにかんする覚え書

湯川和夫

1

科学的社会主義はヒューマニズムである、といわれている。そして、それはそれとして正しい命題である。しかし、また民主々義も、自由主義も、空想的社会主義も、そしてアナーキズムも、ヒューマニズムを含んでいる。そして、プラグマティズムや実存主義についてもやはり同じことが言えるのではないか。――とすれば、およそ思想という名に値いする思想は、すべて、ヒューマンなもの、人間的なものを含んでいる、と言えるかもしれない。

しかし、ヒューマンなもの、人間的なものを含んでいるからと言って、かならずしも正しい社会認識、科学的な歴史観を含んでいるわけではない。もちろん、正しい社会認識、科学的な歴史観を含んでいないからと言って、あるいはまちがった社会認識、非科学的な歴史観をふくんでいるからと言って、そこに含まれているヒューマンなもの、人間的なものまでも、すべてにせものであるとみなすようなことをしてはならないだろう。しかし、また、アナーキズムや実存主義の思想に含まれているヒューマンなもの、人間的なものに惹かれて、そこに含まれているまちがった認識、非合理的（あるいは非科学的）な社会認識、歴史観までも容認してしまうようなことのないように警戒しなけ

ればならない。また、そこに含まれているヒューマンなもの、人間的なものが、ある場合には、インヒューマンなもの、非人間的なものと背中あわせになっていることさえある。ということに留意する必要があるだろう。

科学的社会主義はヒューマニズムであると言われている。そして、わたくし自身もそう考えている。しかし、科学的社会主義だけが真のヒューマニズムである、というような表現は避けたほうがよいと思う。というのは、その言葉は、他の諸思想はすべてにせのヒューマニズムである、と主張しているかのようにきこえるからである。そういう誤解を招くような表現はできるだけ避けなければならないが、しかし、同時にまた、われわれは科学的社会主義の合理性・科学性を強調しなければならない。もちろん、科学的社会主義はたんなる科学ではない。それは科学的な思想であり、ヒューマニズムの思想である。合理性・科学性とヒューマニズム(あるいはヒューマンなもの)との統一――ここにこそ科学的社会主義の、他の諸思想にたいする優越性がある。こういう言いかたは、いささか教条主義的な感じをひとに与えるかもしれない。しかし、ここのところは、やはり、はっきりおさえておく必要があるように思われる。

2

科学と思想、あるいは理論と思想とは明確に区別されなければならない。われわれの実践は理論によってみちびかれなければならない、われわれのたたかいは科学によって武装されなければならない。そして、われわれの行動の目標・手段・方法が、科学的・合理的な認識にもとづいて決定されなければならないことは明らかである。また、われわれをめぐる現実にかんするわれわれの認識（＝対象認識）が、われわれの思想形成に大きく作用することもたしかである。しかし、われわれ一人ひとりの実践と行動をその根底において規定するもの――それはわれわれ一人ひとり

が抱いている思想であり、われわれをめぐる現実、あるいは情況にたいするわれわれの評価であり、態度である。現実あるいは状況をどう評価するかにしたがって、ある人たちは現実、あるいは情況に対立してそれに積極的に働きかけ、また他の人たちは現実、あるいは情況の流れに身を委ねる。もちろん、そのほかにも、現実、あるいは情況にたいするさまざまの対処の仕方があるだろうが、要するに、現実、あるいは情況にたいする評価あるいは態度の相違に応じて、人びとはそれぞれ異なった仕方で現実、あるいは情況に対処するのである。

ところで、現実、あるいは情況にたいする人びとの評価、あるいは態度の基礎にあるものは何だろうか。――いうまでもなくそれは価値意識である。われわれは、そのときどきの現実、あるいは情況を（合理的・科学的に、あるいは非合理的・非科学的に）認識するとともに、自分自身の価値意識にもとづいて、また自分自身の認識に即して、その現実、あるいは情況を評価する。つまり具体的な価値判断を行なう。したがって、われわれの具体的な価値判断は、対象的・具体的な事実判断と主体的・抽象的な価値意識、この二つのモメントによって構成されている。そして、科学的社会主義がヒューマニズムであるといわれるのは、この思想の基礎にある価値意識がヒューマンな価値意識、ヒューマニズムであるからである。また、科学的社会主義の思想が他の諸思想に優越するのは、合理的・科学的な対象認識（＝事実判断）とヒューマンな価価意識とが、この思想において結合・統一されているからである。

3

およそ思想という名に値いする思想が、すべてヒューマニズムの思想であるかどうかは別としても、社会主義という名で呼ばれる思想は、すべてヒューマニズムの思想であると言ってよいだろう。というのは、社会主義の実現をめ

ざすということは、結局人間が人間らしく生きてゆける社会をつくりたいという願望、あるいは欲求にもとづいているからである。つまり、人間が人間らしく生きてゆける社会（ヒューマンな社会）――それは社会主義・共産主義の社会以外には考えられないという判断があるからこそ、社会主義が主張されるのである。

しかし、例えば科学的社会主義がヒューマニズムであると言われるのは、またこの思想の基礎にある価値意識がヒューマンな価値意識であるとされるのは、この思想がヒューマンな社会をつくりたいという願望を含んでいるということだけによるのであろうか。わたくしはそうではないと思う。また、科学的社会主義の思想において合理性・科学性とヒューマンな価値意識とが結合・統一されているということは、たんにこの思想がヒューマンな社会を実現するための、合理的・科学的なプログラム、あるいは手段・方法の体系である、ということだけを意味しているわけではないのである。

思想はたしかにある意味では体系である。そして、それはなんらかの対象認識と価値意識にもとづいて構成されている。そして、そこには事実判断だけでなく、価値判断もふくまれている。思想は、直接的には、むしろ、価値判断の体系であるということもできよう。また、そこには過去や現在の事実にたいする事実判断・価値判断だけでなく、あるべき現実にかんするプログラムも含まれている。それらすべてを包括したものが体系としての思想である。しかし、思想はたんなる体系ではない。それは個々の人間の、そのときどきの意識と行動に密接につながっている。もちろん、理論（あるいは科学・技術）もまた人びとの実践の手段・方法を提供するという意味では、やはり人びとの意識と行動につながっている。しかし、思想と個々人の意識と行動とのつながりは、それとは質的に異なったつながりである。

思想は価値意識をふくんでいる。しかし、ただそのことによってのみ理論と区別されるわけではない。われわれは理論を自己の意識のなかに取りいれ、自己の行動に利用することができる。あたかも機械や道具を使用するように、われわれは理論を利用することができる。しかし、思想を道具のように使用することはできないのである。おなじ価値意識を共有するということはあっても、（また、それはそれとしてきわめて重要なことであるが、）本来の意味における価値意識はどこまでも各個人のものである。それは個々人の意識と行動のなかにおいてのみ作用し、存在する。少なくとも、そういう存在の仕方が、価値意識の本来の存在の仕方である。同時にまた、それは思想の本来の存在の仕方でもあるだろう。

4

前節で述べたように、科学的社会主義の基礎にある価値意識がヒューマンな価値意識であるとされるのは、この思想がヒューマンな社会をつくりたいという願望を含んでいることだけによるのではない。それはこの思想にもとづいてつくられる組織、またこの思想にもとづいて展開されるたたかいに、そして何よりもこの思想を拠りどころにしてたたかう人びとの思想に、ヒューマンな価値意識があますところなく滲透している、あるいは滲透していなければならないと考えられているからである。

ところで、ヒューマンな価値意識が、組織とたたかいのなかに、またたたかう人びとの思想のなかに、あますところなく滲透している、あるいは滲透していなければならない、ということはいったいどういうことを意味するのだろうか。――このことを明らかにするためには、ヒューマンな価値意識とは何かということを、多少とも吟味しておく

必要があるように思われる。

ヒューマンな価値意識とは何か。――簡単にいえば、人間が非人間的な状態におかれてはならない、あるいは非人間的に扱われてはならない、という価値意識であろう。また、別の言いかたをすれば、それは人間には人間らしく生きてゆく権利がある、という価値意識でもあるだろう。そういう価値意識にもとづいて、例えば、人間が人間らしく生きてゆける社会をつくらなければならないという価値判断が、公害を除去しなければならないという価値判断が、またベトナム人民を支援しなければならないという価値判断が行なわれるのである。（もちろん、実際には、抽象的な価値意識と具体的な価値判断とのあいだには、さまざまの媒介項――現状分折・その他の事実判断――がはいるだろうが。）

ところで、人間が非人間的な状態におかれてはならないという価値意識は、いわば純粋に倫理的な価値意識であり、価値判断としてはきわめて抽象的な価値判断である。これにたいして、人間が人間らしく生きてゆける社会をつくらなければならないという判断は、比較的、抽象的な価値判断ではあるが、ある意味ではすでに政治的な価値判断である。また、例えば、アナーキズムと科学的社会主義とのあいだには、人間が人間らしく生きてゆける社会をつくらなければならないと判断するかぎりでは、（政治的）判断の相違はない。しかし両者のあいだには、あるべき社会主義社会の構想において、また、あるべき社会を実現する方法・手段・路線について、見解の相違がある。したがって、そこには明らかに政治的価値判断の相違があるが、ここでそのことについて詳論しようとは思わない。わたくしが指摘したいことは、両者のあいだに、倫理的な価値意識、あるいは比較的、抽象的な価値判断において、すでに見解の相違と思想の対立があるのではないかということである。

アナーキズムには、個人の自由を何よりも重んじるという価値意識が含まれている。そして、人間が人間らしく生きてゆける社会として社会主義社会が構想される場合でも、その構想（無政府、あるいは権力否定の構想）には、やはり、かかる価値意識が投影している。個人の自由を尊重するという価値意識は、それ自体としてはやはりヒューマンな価値意識であるということができよう。しかし、アナーキズムの場合には、個人の自由を尊重するという価値意識と背中あわせに、個人の自由を何よりも、そして極端に重んじる、したがって、自己の自由を何よりも重んじるところの、「超人」的＝非人間的な、また非合理的・衝動的な価値意識が共存している場合が少なくないように思われる。わたくしは、だからと言って、アナーキズムが、多くの場合、すぐれてヒューマンなもの、きわめて純粋なヒューマニズムをふくんでいることまでも否定しようとは思わない。しかし、そのヒューマニズムがいわば個人主義的・自由主義的ヒューマニズムに傾斜しているということを指摘しておきたいと思う。

これにたいして、科学的社会主義のヒューマニズムはいわば人民的ヒューマニズムである。それは人間には人間らしく生きてゆく権利があるという価値意識である。その点ではアナーキズムと異ならない。しかし、同時にまた、それは人民の連帯、人民のたたかいによって人間としての権利を回復しなければならないとする価値意識であり、価値判断である。もちろん、アナーキズムと科学的社会主義とのあいだには、事実判断の相違にもとづく政治路線、あるいは政治的戦略・戦術の相違があることはたしかである。しかし、そういう相違が価値意識、あるいは（原理的・抽象的な）価値判断の相違にもつながっていることを見逃してはならないと思う。また、一般的にいえば、異なった思想のあいだの相違を究明しようとする場合、われわれはそれぞれの思想にふくまれている事実判断や政治的価値判断の相違だけでなく、思想の基礎にある倫理的価値意識の質的な相異にもっと眼をむける必要があるように思われる。

5

人間的な価値意識、ヒューマンな価値意識――それは人間はすべて人間らしく生きてゆく権利があるという「人間尊重・人間解放」の価値意識である。近代思想の歴史に結びつけていえば、それはブルジョア民主主義革命の思想、例えば「自然権」、あるいは「天賦人権」の思想に、端的に示されている。そして、そのなかには、当然、「個人の自由」の観念（＝価値意識）が含まれている。しかし、「個人の自由」が個人主義的・自由主義的方向に傾斜するとき、人間的な価値意識と背中あわせに、「自己」中心的・非合理的な、「超人」的・非人間的な価値意識が共存しがちである。そして、ある場合には、人間的価値意識はたんなる「自己主張」・「反逆」・「革命」・「暴力」に陶酔する異常心理に転化する。――権力の暴力性にたいする、「革命的暴力」の正当性が教条的に強調されることによって、日常的世界における暴力的・非人間的行動が「正当化」されるのである。人間が人間らしく生きてゆける社会の実現を願うという人間的な価値意識のゆえに、革命が志向されることはたしかである。しかし、革命への志向がたんなるポーズではないとしても、また「狂気」の所産ではないとしても、革命への志向のゆえに、日常的世界において他の人間を非人間的にあつかい、他人の生きる権利を奪うことを公然と主張する思想に、人間的な価値意識が含まれていると考えることはもはや不可能である。このことは、おそらく、あらためて述べるまでもなく明らかなことであろう。わたくしは、むしろ、それほど極端でない場合について、また必ずしもそれほど自明ではないことについて、試論的に述べてみたいと思う。

いま、この日本という国をひろく見わたして、あるいは世界と言ってもいいかもしれないが、（日本の）大学の構

内ほど（直接的）暴力の支配が日常化している世界は、あまり類がないように思われる。そして、そこでは暴力の非人間性にたいする人びとの感覚がかなり麻痺させられているが、しかし、それにしても……と思わずにはいられなかった一つの小さな経験について記したい。――Aという学生がいた。かれはある公害病を「告発する会」の熱心な活動家であった。かれは会うたびごとに、企業や官庁の態度や姿勢を非難し、またその非人間性を糾弾していた。かれの人間的な価値意識と闘争へのひたむきな熱情にたいしてわたくしは共感と尊敬の念を抱いていた。ところが、たまたま学内のある暴力事件が話題になったとき、かれはまったく冷淡な態度しか示さなかったのである。――これはいったいどういうことなのか。

公害を除去しなければならない、人間が人間らしく生きてゆける社会をつくらなければならない、あるいは社会をつくりかえなければならない――そういう人間的な価値意識にもとづく価値判断にしたがって人びとは組織に加わり、闘争に参加する。ところが、㈠闘争に参加し、たたかいを続けるなかで、たたかいへの「自己陶酔」的な熱情だけが強まって、いつの間にか人間的な価値意識を喪失してしまうということがあるのではないか。他方では㈡大きな組織がかかえている政治的・組織的な課題への配慮と関心のゆえに、（そういう配慮と関心は必要なことにはちがいないが、）組織の行動からいわば「初心」のみずみずしさ（生き生きとした価値意識）が弱化してゆく傾向がありはしないか。また、㈢そういう傾向への反撥もあって、あるいは政治的・組織的課題の複雑さと解決の困難さに耐えかねて、個人主義的・自由主義的な、あるいは「自己主張」＝「自己否定」型、あるいは「自己陶酔」型、さらには「暴力肯定」型の行動様式が発生するのではないか。――思いつくままに書き記した雑駁な感想にすぎないが、わたくしが言いたいことは要するにこういうことである。――㈠きびしく、はげしい人間的価値意識と（非合理主義的な）

「自己陶酔」的＝独善的熱情とは明確に区別されなければならない。㈡人間的価値意識と政治的合目的性＝合理性とのあいだの矛盾と統一の問題を解明しなければならない。㈢「人民の統一と団結」と「個人の自発性・創意性」とは原則的には矛盾しないが、前者から民主々義が欠落し、後者が個人主義・自由主義に傾斜するならば、両者は真向から対立・矛盾するだろう。

6

人間的な価値意識、人間が非人間的にあつかわれてはならない、人間にはすべて人間らしく生きてゆく権利があるという価値意識は、すでに述べたように、ブルジョア民主々義革命の思想として、「自然権」、あるいは「天賦人権」の思想として結晶した。また、今日、革命を志向する思想の基礎にある価値意識も、やはり人間的な価値意識である。しかし、人間的な価値意識は決して革命にのみつながる価値意識ではない。むしろ、それは人びとの日常的世界、われわれの日々の生活と行動に密接につながっている。日常的世界の価値意識としてとらえられた人間的価値意識の観念は、いうまでもなく、「基本的人権」の観念である。「自然権」・「天賦人権」と「基本的人権」とは、本質的には、同じ一つのものであるが、アメリカ合衆国独立宣言、その他で明らかなように、「自然権」・「天賦人権」は抵抗権・革命権と密接不可分の関係にある。ところが、「基本的人権」は、抵抗権・革命権の否定はしないまでも、それについては、「判断中止」にしておいても成立する観念である。この点につながりのある世界人権宣言（国連第三回総会で採択、一九四八年）前文の一節を引用してみよう。

人間社会のすべての構成員がもつ固有の尊厳と、平等で奪うことのできない権利とを承認することは、世界にお

ける自由、正義および平和の基礎であるから、

人権の無視と軽侮とは、人類の良心をふみんじる野蛮行為を生ぜしめかつ人類が言論および信仰の自由と恐怖および欠乏からの自由とを享有すべき世界の出現は、一般の人びとの最高の願望として宣言されているから、人間が専制と圧迫にたいする最後の手段として反逆に訴えざるを得ないものであってはならないならば人権が法の支配によって保護されなければならないことは肝要であるから、……（中略）

国際連合の諸国民は、憲章において、基本的人権、人間の尊厳および価値ならびに男女の同権にかんするその信念を、ふたたび確認し、またいっそう大きな自由のなかで社会的進歩と生活水準の向上とを促進することを決意したので……（中略）……

すべての国の人民と国家とが達成すべき共通の基準として、この宣言を布告する。（旁点――引用者）

わたくしは、いま、「抵抗権・革命権」につながる「自然権」と「日常的世界」の価値意識としての「基本的人権」とを区別した。しかし、ここで確認しておかなければならないことは、基本的人権がじゅうぶんに尊重される社会をつくるためにこそ、革命が行なわれるのだということである。内戦を伴なう革命というきわめて非日常的な情況のもとにおいて、反革命勢力に属する人たちの基本的人権が革命勢力によって侵害されたとしても、民族解放戦争において外国軍やかいらい軍の将兵が解放軍の銃火を浴びてたおれても、誰も革命勢力や解放軍を非難することはできないだろう。しかし、内戦も解放戦争も起こっていない日常的世界において、あるいは革命と内戦の時期がすでに経過した後の社会主義国の日常的世界において、「革命の大義」によって人びとの基本的人権を侵害する行為は、「人権の無視と軽侮」であり、「人類の良心をふみにじる野蛮行為」として非難されなければならないだろう。また、假に「革

命の大義」がたんなる空文句ではないとしても、それによって「日常的世界」における「基本的人権」の侵害を正当化することはできない筈である。

7

前々節の末尾の部分で指摘した問題点のなかの第二の論点について、多少の註釈を加えておきたい。

人間にはすべて人間らしく生きてゆく権利があるという人間的な価値意識にもとづいて、㈠例えば身体障害児の世話をする施設で働く。――ここでは価値意識とその人の生活、あるいは行動とは最も直接的につながっている。この場合、その人の行動はそれ自体が目的であってなんらかの目的を実現するための手段ではない。㈡施設に働く職員の増員、あるいは施設の拡充を政府に要求する行動――この行動はすでに増員、あるいは施設拡充という目的にたいする手段としての行動である。しかし、ここでは、まだ、倫理的価値意識と政治的行動とのあいだに直接的なつながりがある。㈢政府や企業とたたかう組織の一員としての、組織内部における政治的、組織的行動――この行動はまったく手段としての行動である。ここでは、組織の活動がすでになんらかの政治的目的にたいする手段であるが、個人の行動は組織の活動の手段である。したがって個人の倫理的価値意識とかれの行動とのあいだにはもはや間接的なつながりしか存在しない。両者のあいだに組織が介在するからである。もちろん、個人はその倫理的価値意識のゆえに、また組織の活動の窮極の目的を自己自身のものでもあると考えるからこそ、組織の活動に参加するのである。しかし、組織の活動はやはり組織の活動であって、個々人の手づくりの活動とは質的に異なっている。組織はそれ自身のメカニズムにしたがって意志決定をおこない、合目的的に活動する。そして、個人の行動はすでに述べたように、組

織の活動の手段である。組織の意志決定と活動のメカニズムが民主的であればあるほど、組織と個人の対立は小さくなる。しかし、組織と個人とは次元を異にする存在であり、相違と対立は、むしろ、必然である。原理的にも、具体的にも、相異と対立を的確に解明することによってのみ、対立・矛盾を正しく解決することができるのである。

たしかに、ある意味では、個人の行動は組織の活動の手段である。そのために、組織という政治的世界においては、人間がたんなる手段として、したがって、非人間的に扱われる傾向が必然的に生じる。しかし、本質的には、組織そのものは人間の手段であり、道具である。人間は共同の目的を実現するために組織をつくり、組織を使用する。まず、このことを確認しておきたいと思う。ところが、組織は、文字どおりの道具とちがって、個々人がそれぞれ独立して使うものではない。そのために、実際には、逆に、組織が個々人をたんなる手段として使うという歪みや、組織によって個々人が非人間的に扱われるという現象が生じる。そのことを完全に防ぐ絶対的な方法は存在しないかもしれない。しかし、組織内部における人間的価値意識の滲透と民主々義の徹底が、おそらく、最も有効な方法であろう。それは人間が非人間的あつかわれることをふせぐ有効な方法であるばかりでなく、同時にまた、科学的社会主義のヒューマニズムの理念でもあるだろう。かかる理念の実現をめざす志向と努力が欠落した社会主義は、それがどういう名で呼ばれているにせよ、もはや社会主義の名に値いしないだろう。社会主義の社会がヒューマニズムの社会であること、社会主義への願望がヒューマニズムに根ざすものであることを強調するだけで終ってはならないのである。前述のようなヒューマニズムの理念――「人間的価値意識の滲透と民主々義の徹底」――の実現をめざす志向と努力――そこにこそ社会主義をヒューマニズムたらしめる核心があるのではないが、わたくしはそんな風に考えている。（一九七三・八・三）